

神戸で「リアリズムの詩人たち展」

戦後の姫路で結成されたアナキスト詩人集団「イオム同盟」、常に地べたからの視点で生活を切り取った林喜芳、そして社会事業に尽くしながら多くの詩作も残した賀川豊彦。彼らの作品と生涯に迫る「リアリズムの詩人たち展」が十一十五日、神戸市灘区原田通三の原田の森ギャラリーで開かれる。

(平松正子)

社会に根差した
言葉の足跡

イオム同盟は一九四七年、向井孝、山口英、柳井秀による詩誌「IOM」の創刊に始まる詩文学運動。後に高島洋、生田均、崎本正が加わった。会話的口語で明瞭、的確に書き、詩以前の思想を探索。五七年に「定本IOM同盟詩集」を発行し、結成時の「盟約」に従って十年間の活動を完了した。

「露天商人の歌」で知られる林喜芳(一九〇八—一九四四年)は神戸・東川崎町生まれ。高等小学校を中退後、市役所給仕、印刷工、露天商人、占い師など職を転々とした。十代半ばから詩作を始め、五十一歳での初詩集「露天」で一躍有名に。以後、生まれ育った新開地界隈の風俗などを精力的に

作品と生涯に迫る

「イオム同盟」、林喜芳、賀川豊彦

詩やエッセーに書きつづった。

神戸での貧困層の救済活動開始から九百年を迎える賀川豊彦(一八八八—一九六〇年)は、自伝的小説「死線を越えて」など膨大な著作の中に、詩集四冊が含まれる。与謝野晶子の序文のある「涙の二等分」や「永遠の乳房」など、詩作には賀川の人道主義や博愛精神があふれている。

本展では著作や雑誌、写真、原稿、書簡などで彼らの思想を伝える。企画担当の松尾茂夫・県現代詩協会副会長は「時代は異なるが、賀川の世界連邦運動などはイオムのエス・ペラントへの取り組みにも通ずる。一方、林は自らの人生を詩とし、社会に向き合った。華やかな神戸モダニズムだけだけでなく、底辺を支えた詩人たちも知ってほしい」と話す。

現役の詩人らの絵画作品などを集めた「ひょうご詩画展」、県内の詩誌三十一誌を紹介する「兵庫・詩の現在展」も同時開催。十四日午後二時から、詩人たかとう匡子さんによる講演「リアリズムの深淵—林喜芳と高島洋を中心に」がある。無料。同ギャラリー

☎078・801・15

91



「イオム同盟」の同人たち